

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02235

研究課題名(和文) 科学技術時代における宗教倫理の展開 「不在者の倫理」の構築

研究課題名(英文) The Development of Religious Ethics in the Age of Science and Technology: The Construction of "Ethics of the Absent"

研究代表者

小原 克博 (Kohara, Katsuhiko)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：70288596

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「不在者の倫理」の概念を提唱し、現代世帯の人間中心の利益追求を超える新たな視点を開くことを試みた。「食の倫理」「犠牲の倫理」「記憶の倫理」をその基盤として考察し、人間の身体性、世代間倫理、そして人工物と人間の相互作用などを検討した。また、良心概念を拡張し、未来世代や大地(地球環境)、人工物(AIやロボット)と「共に知る」こと(consienceの原義)の倫理的な重要性を考察し、これらが過剰な人間中心主義や現代世帯中心主義を克服する可能性を示唆した。現代日本の社会状況を踏まえながら、公共圏における宗教の位置づけと宗教リテラシーの必要性についても考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「不在者の倫理」という新たな視点を提示した。学術的には、倫理学、神学、宗教学、AIや環境科学などの交差点に位置し、各分野の知見を融合し、既存の枠組みを批判的に再評価する可能性を提供した。これは現代社会における倫理的課題の深層を探求する手法として有効であり、本研究の学術的意義であると言える。社会的意義は、環境問題や人間の消費行動、世代間倫理など、現代社会が直面する課題への対処方法を示している点にある。一つひとつの課題を個別に取り扱うのではなく、その全体像を「不在者の倫理」という視点から見据えることにより、社会の持続可能性と公正さを考慮に入れた長期的な視点を提供することができた。

研究成果の概要(英文)：This study proposed the concept of "ethics of the absent" and attempted to open a new perspective beyond the current generation's anthropocentric pursuit of profit. Considering the "ethics of food," the "ethics of sacrifice," and the "ethics of memory" as its foundations, this study examined human corporeality, intergenerational ethics, and the interaction between artifacts and humans. In addition, I extended the concept of conscience and considered the ethical importance of "knowing together" (the original meaning of "conscience") with the future generation, the earth (global environment), and artifacts (AI and robots), and suggested that these may overcome excessive anthropocentrism and present generation-centrism. The position of religion in the public sphere and the need for religious literacy were also discussed, taking into account the social situation in contemporary Japan.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教倫理 科学技術 世代間倫理 環境問題 人工知能 新型コロナウイルス 公共性 良心

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として、東日本大震災(2011年)以降の状況、とりわけ、それが引き起こした原発問題に対し、日本の宗教界あるいは宗教研究において宗教倫理的な議論が十分に展開されていない状況があった。もちろん、日本の宗教界からも様々な声明が出され、それらは震災直後の宗教界の考えの一端を知る上で貴重であるが、いずれの論点も数行でまとめられているに過ぎず、持続的に学術的議論を喚起するものになっていなかった。

他方、急速に変容しつつあるとはいえ、伝統宗教の多くは「過去の不在者」(死者)との対話の作法を有しており、それは解釈し直すことによって、現代的な課題に寄与するポテンシャルを有している。

また、環境問題や持続可能な社会の形成に関して、ハンス・ヨナス『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』(2000年)に代表されるように「未来世代の倫理」がテーマ化されていた。地球規模の持続可能性を考えるためには未来世代への責任原理を欠くことはできないこと、言い換えれば、「未来の不在者」に対する倫理的責任の認識が必要であることは認識されつつあった。しかし現状では、以上のような過去に対する倫理的視線と未来に対する倫理的視線は、ほとんど接点を持っていない。これら過去と未来に向けられた別々の倫理的ベクトルを統合し、相補的に強化する視点として「不在者の倫理」を構想する必要性が、研究開始当初に存在していた。

2. 研究の目的

本研究は、科学技術が人間の欲望を先導する時代において、宗教倫理の視点から、現代世代の倫理的責任を明確化し、世代を超えた新たな公共性の認識を拓くことを目的とする。近代国家における公共性は、現代世代の人間の利益を最大化することを前提とし、科学技術はそのための道具とされてきた。こうした近代的枠組みを批判し、過剰に人間中心のでも、現代世代中心のでもない倫理規範を提示するためには、死者(過去の不在者)の想起や未来世代(未来の不在者)への責任意識が欠かせない。本研究では、それを「不在者の倫理」としてとらえ、過去および未来に従来別々に向けられてきた倫理的関心(責任)を統合する。そこから現在の存在者である我々が負うべき具体的な課題を、「食」「犠牲」「記憶」をキーコンセプトにして、展開する。

「現在の存在者」の利益を最大化するために用いられる科学技術を、ただ現代世代の利害関係、現代世代の公共性の内部において批判するだけでは十分ではない。宗教学や宗教倫理においてなし得る固有の働きは「過去の不在者」にかかわる豊穡なりソースを活用し、同時に「未来の不在者」に対する想像力を活性化することを通じて、過去と未来に対する倫理的射程を拡大し、それによって現代世代に課せられた責任を喚起することである。その目的のために、本研究では以下の三つの倫理的視点(いずれも過去と未来を接続)を設定した。

(1) 食の倫理: 現代世代が未来世代に残されるべき様々な資産(食・エネルギー・自然環境)を先食いしている現状を実証的に分析すると同時に、その倫理的な課題を明らかにする。英語圏では2005年頃からキリスト教神学の領域において、食を問う研究が本格化している。そういった先行研究も十分に視野に入れて、国際的な議論に対応できるようにする。

(2) 犠牲の倫理: 動物供犠や犠牲は人類史に見れば、宗教的行為の中核を占めていた。また、近代国家は伝統的な「犠牲」の観念を迷信として破棄したのではなく「犠牲のシステム」としてアップグレードさせた。こうした歴史的経緯を踏まえながら、特定の人々や特定の地域に犠牲を強いることによって成り立っている社会構造やエネルギー供給に対して宗教倫理的な視座から批評を行い、科学技術によって駆り立てられている人間の消費行動が、どのような犠牲のもとに成り立っているのかを明らかにしていく。

(3) 記憶の倫理: 伝統宗教は何世紀にもわたる経験を記憶・継承する作法を有している。人間・自然・動物の関係史(宗教史)を顧みながら、世代間倫理に接続可能な「記憶の倫理」を明らかにしていく。この領域においては、ホロコーストの記憶をめぐる社会学的研究など、参考になる先行事例が比較的豊富にある。

以上のような三つの宗教倫理的基軸を統合するプラットフォームとして「不在者の倫理」を構築し、「過去の不在者」と「未来の不在者」を統合的に見、その中間存在としての「現在の存在者」(現代世代の我々)を倫理的に止揚する道筋を明らかにしていくことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は主として、以下のような研究の方法をとった。

(1) 文献による調査・研究

本研究の理論構築に寄与し得る以下のような関連文献を収集した。

科学的世界観と宗教の関係に関する文献: 西洋における近代科学の発展とその背景にあるキリスト教の自然理解の関係、および、日本における宗教と科学の関係についての文献を収集する。
宗教倫理に関する文献: 主要な宗教伝統における倫理観の構築に関する文献を収集する。特に、日本宗教における倫理的基盤に関するものを重点的に収集する。

宗教と公共性に関する文献: 公共性、世俗主義、ポスト世俗主義に関連する文献を収集する。

未来世代への倫理（世代間倫理）に関する文献：先祖祭祀論、環境倫理などから、未来世代への倫理を構築していくための手がかりとなる文献を収集する。

宗教と食・犠牲・記憶に関する文献：食・犠牲・記憶に関しては、それぞれ膨大な文献があるが、ここでは本研究の趣旨にそって、現代および近未来の課題に直接的につながるものを中心に文献収集を行う。

（２）インタビューによる調査・研究

関連学会に参加し、研究の動向を把握した。当初、海外の学会への参加を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大により中止されることが多く、一部、オンライン参加となった。

本研究課題に関連するテーマに取り組んでいる海外の研究者へのインタビューをオンラインで行った。

（３）現地調査

当初、ドイツでの調査を計画していたが、新型コロナウイルスの関係で十分に行うことができなかった。しかし、ドイツ・テュービンゲン大学で講義をする機会を利用して、現地のコンタクト・パーソンと意見交換することができた。

（４）研究成果の発表

毎年度、学会等で発表を行った。

毎年度、研究成果の一部を論文や著作として発表し、読者からフィードバックを得た。

市民向けの講演会等で研究成果をわかりやすく発信し、本研究の意義と重要性をアピールした。

4．研究成果

本研究は、現在世代の人間の利益を最大化することを前提とし、科学技術をそのための道具としてきた近代的枠組みを批判し、過剰に人間中心の、現代世代中心でもない倫理規範を提示し、死者（過去の不在者）の想起や未来世代（未来の不在者）への責任意識を包括する新たな公共性を目指して「不在者の倫理」の可能性を考察した。その土台として「食の倫理」「犠牲の倫理」「記憶の倫理」を想定したが、研究を進める中で、それらに係るその他の課題も見えてきた。以下にその研究成果の概要を記す。

（１）食の倫理

食の倫理は、人間の身体性に光を当てる。西洋思想において、人間の尊厳はもっぱら魂の中に見出され、肉体の中に見出されることはなかった。キリスト教の伝統においては、肉体が蔑視されることも少なくなかった。しかし、本研究にとって重要な「世代間倫理」を具体的なものとして構築するためには、時間的および空間的な次元における間身体性（時間的・空間的ギャップを架橋する身体的つながり）が重要であり、その間身体性の土台となるのは、すべての命を支える「大地性」であることを認識するに至った。

また、新型コロナウイルスの感染拡大の中で、もっとも影響を受けている領域の一つが食にかかわる行為やビジネスであったが、食は我々の身体性・動物性・大地性に深く関わると同時に、それら異なる次元をつなぎとめる営みであることを、神学的・宗教学的な視点から明らかにした。

人間と地球環境（生態系）の間の均衡が急速に失われた結果、新型コロナウイルスや気候変動が生じ、そこには今後の人類が向き合っていかなければならない共通の課題が潜んでいることを考察した。現在世代の欲望の肥大化によって生じた結果（環境負荷）は未来世代にまで悪影響を及ぼすが、その構造を分析・制御するためには、技術発展だけでなく、人間の消費行動（食とエネルギーの消費）を適切に制御できる倫理が必要となる。

（２）犠牲の倫理

人間社会にはその原初的な段階から、社会構造を維持するために身体を犠牲として捧げることを求めてきた。近代国家は伝統的な「犠牲」の観念を迷信として破棄したのではなく「犠牲のシステム」としてアップグレードさせ、それは科学技術によって補完されている。科学技術によって促進される人間の消費欲求は他者の犠牲を容易に正当化し、それは未来世代の犠牲にまで及ぶことを、倫理的課題として明確化する必要がある。

また、近代日本において、そのシステムは国体の形成、戦争協力という形で具現化されたのであり、そのことを戦後の平和主義の課題と合わせて考察した。

（３）エネルギー問題

エネルギー問題は、現在世代の消費行動や政策決定が未来世代や未来の地球環境に決定的な影響を与えることを示しているが、現実には、未来世代の資産を現在世代が先食いしているかのような状況がある。こうした問題を考え、現在世代中心主義を抑制するためには、より広い歴史感覚に支えられたコミュニティ意識（世代間コミュニティ）が必要となる。そのために、今ある存在が「不在のもの」によって構成されていることを科学の視点からも認識し、「過去の不在者」との相互関係を「未来の不在者」への責任へと転換する「不在者の倫理」を、科学と宗教を架橋する倫理として構築する必要性を考察した。

（４）人工物と人間の関係

今後、人工知能やロボットなどの人工物が、人間の経済活動やエネルギー消費を最適化することが予想されるが、他方、人間の価値判断がスマホ（SNSを含む）人工知能等の人工物から多大な影響を受けていることも認識しなければならない。その意味では、人間と人工物（技術）の根源的な相互浸透性を視野に入れることのできる価値規範が求められる。人工知能のような人

工物は「不在者」の世界から「存在者」の世界へと越境してくる可能性を持つ。しかし、「不在者」の「存在者」の世界への越境行為は決して新しいことではなく、むしろ、両者のコミュニケーション作法に関して、我々は膨大な宗教的・文化的蓄積（モノに霊が宿る付喪神信仰など）を有している。そうした知見を生かして、近未来社会にふさわしい、人間と人工物を架橋する倫理的規範を考えていく必要がある。

また、科学技術がもたらす現代の特徴を俯瞰するために、「自然 人間 人工物」という伝統的な区分が曖昧化しつつあることに着眼し、その事例の一つとして人工知能をめぐる倫理的課題を考察した。日本の文化においては人間とモノ（人工物）との境界線が曖昧で、両者間の交流が比較的容易である。今後の高齢化社会において、AI や AI を実装したロボットが高齢者のウェルビーイング向上に貢献できる可能性がある。AI による最適化技術や生成 AI の発展は、人間の欲望を増幅させる側面を持つだけに、その作用を批判的に対象化できる倫理が必要となるが、「不在者の倫理」はその一助となり得る。

(5) 良心概念の拡張

「不在者の倫理」を構築するための思想的手がかりとして「良心」概念に着目した。西洋語の「良心」(conscience) は「共に知る」という原義を持っているが、その伝統的な議論に加え、未来世代と「共に知る」ことの倫理的重要性を論じ、「良心」の概念拡張が「不在者の倫理」に貢献することを提示した。すなわち、未来世代と「共に知る」、大地と「共に知る」、人工物と「共に知る」ことによって、過剰な人間中心主義や現在世代中心主義を克服する可能性を考察した。

(6) 宗教リテラシーの必要性

安倍元首相の銃撃事件（2022 年 7 月）以降、宗教の公共圏における位置づけが厳しく問われることになった。その関係で、「宗教 2 世」問題もクローズアップされることになったが、「宗教 2 世」と呼ばれる人たちは、現在の社会から「不在」とも言えるほどに、公的な視点からは見えない存在であったことが明らかになってきた。こうしたアクチュアルな課題に関連し、特定の人々を「不在」としないためにも「不在者の倫理」は有効である。そのことを近未来の政教関係の中で問う必要があることや宗教リテラシーの必要性について考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小原克博	4. 巻 11月号
2. 論文標題 パンデミックとキリスト教 神学的諸問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsuhiko KOHARA	4. 巻 30
2. 論文標題 Issues for Religions in Peace Building: From the Perspective of the Study of Conscience and Integral Peace	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of Oriental Studies	6. 最初と最後の頁 153-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原克博	4. 巻 660
2. 論文標題 エネルギー問題をめぐる倫理的課題と宗教 持続可能な社会のための指針としての「不在者の倫理」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 電気評論	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原克博	4. 巻 2018年4月号
2. 論文標題 環境問題に対して宗教が果たす役割 『ラウダート・シ』を手がかりとして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福音宣教	6. 最初と最後の頁 20-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原克博	4. 巻 2018年3月号
2. 論文標題 犠牲の論理とイエスの倫理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原克博	4. 巻 2022年6月号
2. 論文標題 現代神学と進化論 「感謝と謙虚さの倫理」に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小原克博	4. 巻 76
2. 論文標題 パンデミックとキリスト教	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 キリスト教史学	6. 最初と最後の頁 33-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計37件 (うち招待講演 24件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 近未来・技術社会における宗教の残滓
3. 学会等名 日本宗教学会 第80回学術大会、パネル「科学技術に浸透する/される宗教」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 パンデミックとキリスト教
3. 学会等名 キリスト教史学会 第72回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 宗教とナショナリズム 日本の近現代を中心に
3. 学会等名 東西大学（韓国）「アジア共同体論」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 AIの社会実装がもたらす未来 日本文化を踏まえて考える
3. 学会等名 日新電機 同志社大学 産学連携・技術懇談会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 死刑制度と良心 良心はいかに関わるのか
3. 学会等名 アムネスティ・インターナショナル日本、死刑廃止ネットワークセンター大阪（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 人類の未来と宗教
3. 学会等名 本願寺国際センターゼミナール（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 宗教とパンデミック
3. 学会等名 浄土真宗本願寺派 第9回 宗門教学会議（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 パンデミックに対する神学的考察 キリスト教の歴史を振り返りながら
3. 学会等名 本願寺国際センターゼミナール（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 AIは人生を最適化してくれるのか 人間およびAIにとっての生きる意味
3. 学会等名 名古屋大学 情報学研究科価値創造研究センターポジティブ情報学プロジェクト主催シンポジウム「AI時代に生きる意味を問う 宗教の観点から」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 つなく力と切る力 人類史に見る集団と個の力学
3. 学会等名 京都大学経営管理大学院 JOHNNAN寄付講座「100年続くベンチャーが生まれ育つ都研究会」主催「宗教とイノベーション 世界の起業家が注目する「心」の伝統」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 「心」を学際的に研究する 良心学の試みを事例として
3. 学会等名 宗教倫理学会 研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 新たな世界観を求めて 良心学の視点から
3. 学会等名 公開シンポジウム「COVID-19下における社会変革の本質」(同志社大学ライフリスク研究センター、良心学研究センター、京都大学統合複雑系科学国際研究ユニット、事業承継学会共催)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 AIと一神教は関係あるのか
3. 学会等名 日本宗教学会 第79回学術大会、パネル「AIと世界観・神観念」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 食の神学から見た身体性・動物性・大地性
3. 学会等名 日本基督教学会 近畿支部会、パネル「なぜ食を問うのか 食の神学の課題と展望」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 近未来のビジネス世界を展望する 人工知能・宗教・良心を手がかりに
3. 学会等名 「オープンイノベーションマネジメント実践講座 企業の成長を実現する人と組織の正しいマネジメントの実践」第8回特別講義（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 Diversity in Ethical Attitudes to Animals: Focusing on Japanese Religion and Culture
3. 学会等名 The Third International Symposium organized by Doshisha University, Eberhard Karls Universitaet Tuebingen, and the Doshisha EU Campus at Tuebingen（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 少子高齢化社会における人工知能・ロボットの役割を考える 日本文化を踏まえて
3. 学会等名 京都弁護士会 第24回「法律援助を広げる市民のつどい」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 良心学とは何か 良心の学際的研究
3. 学会等名 行動経済学会 第13回大会 特別セッション「行動経済学と良心」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 自然と人工物の境界に関する宗教倫理的考察 憑依する人工知能
3. 学会等名 宗教学会 第78回学術大会、パネル「人工知能の社会実装化が提議する宗教的問題」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 人工物に「神の像」は宿るのか 人工知能・ロボットの尊厳をめぐる神学的考察
3. 学会等名 日本基督教学会 近畿支部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 宗教が平和に貢献するための課題 良心学と統合的平和の視点から
3. 学会等名 東洋哲学研究所シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 世界を読み解く「宗教」入門
3. 学会等名 第332回オムロン文化フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 キリスト教における死後生観
3. 学会等名 本願寺国際センターゼミナール（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 人工知能・ロボットから良心を考える
3. 学会等名 同志社大学 良心学研究センター 公開シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 一神教とは何か
3. 学会等名 NHK文化センター京都教室（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 人工知能の「尊厳」の考察
3. 学会等名 日本宗教学会 第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 キリスト教と日本
3. 学会等名 NHK文化センター京都教室（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 宗教と現代社会との関わりについて 境界線を行き来する
3. 学会等名 本願寺国際センターゼミナール 第40回特別記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 持続可能な社会を考える視点としての「大地性」「身体性」
3. 学会等名 同志社大学 良心学研究センター 公開シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 エネルギー問題をめぐる倫理的課題と宗教 持続可能な社会のための指針を求めて
3. 学会等名 電気学会 倫理委員会特別企画（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 科学の進歩と生命をめぐる倫理的課題の過去・現在・未来 キリスト教における議論を参考にしながら
3. 学会等名 東洋哲学研究所 連続公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 「いきる」ことの諸相
3. 学会等名 京都大学未来創成学国際研究ユニット、同志社大学創造経済研究センター、一般社団法人 虚空会共催 研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 宗教倫理が問うべき課題
3. 学会等名 宗教倫理学会 研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 「世間」と「公共圏」の間から見える現代社会と宗教の関係
3. 学会等名 宗教倫理学会 研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 進化論とAI 最適化に対する宗教学的視座（パネル「情報と生命 未来の宗教の役割を展望して」）
3. 学会等名 日本宗教学会 第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 キリスト教と良心の視点からAIの社会実装の両義性を問う
3. 学会等名 同志社大学 良心学研究センター 公開シンポジウム「AI、キリスト教、そして良心 同志社で考えるAI・データサイエンス教育」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原克博
2. 発表標題 Politics and Religion: Secularism in Asia
3. 学会等名 Faculty of Social Science GLP Event, Hitotsubashi University（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 天理大学附属おやさと研究所編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学术研究出版	5. 総ページ数 286
3. 書名 エコロジーと宗教性の深化（「宗教倫理学の展望と宗教者の役割 エネルギー政策を語るために」執筆、241-256頁）	

1. 著者名 同志社大学 良心学研究センター編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 182
3. 書名 良心から科学を考える パンデミック時代への視座、「科学と良心の接点」執筆（2-13頁）	

1. 著者名 佐々木 閑、小原 克博	4. 発行年 2020年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 224
3. 書名 宗教は現代人を救えるか	

1. 著者名 楠 淳澄、中西 直樹、嵩 満也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 国際社会と日本仏教、「多文化共生社会としての日本における宗教間教育の必要性」執筆（227-232頁）	

1. 著者名 山極 寿一、小原 克博	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 224
3. 書名 人類の起源、宗教の誕生 ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき	

1. 著者名 堀江 宗正	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 356
3. 書名 宗教と社会の戦後史、「キリスト教と日本社会の間の葛藤と共鳴 宗教的マイノリティが担う平和主義」執筆（209-236頁）	

1. 著者名 小原克博	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本実業出版社	5. 総ページ数 296
3. 書名 ビジネス教養として知っておきたい 世界を読み解く「宗教」入門	

1. 著者名 小原 克博	4. 発行年 2018年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 256
3. 書名 一神教とは何か キリスト教、ユダヤ教、いすらームを知るために	

1. 著者名 島園進	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 360
3. 書名 宗教信仰復興と現代社会、「プロテスタント 再生と抵抗の原理としての信仰復興運動」執筆（21-48頁）	

1. 著者名 島園進、釈 徹宗、若松 英輔、櫻井 義秀、川島 堅二、小原 克博	4. 発行年 2023年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 徹底討論！ 問われる宗教と“カルト”	

〔産業財産権〕

〔その他〕

小原克博 On-Line http://www.kohara.ac/researchmap （小原克博） https://researchmap.jp/katsuhiro.kohara/

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------